

キトラ古墳の調査（飛鳥藤原第135次調査）

四神・十二支と日月・天文に彩られたキトラ古墳の石室は、盗掘孔から流れ込んだ土砂で埋まっていました。これを発掘して棺の型式や副葬品などの遺存状況を確認する調査を、6月から7月にかけておこないました。今にも落下しそうな壁画に注意しながらの調査ではおぼつかないので、壁と天井を保護するステンレス製の枠（通称：鳥かご）を石室内に組み立て、その中で作業をおこないました。橿原考古学研究所および明日香村との共同調査です。

盗掘孔からの流入土は南で分厚く堆積していましたが、その下に厚さ5cmほどの漆片の堆積層が石室全面に広がっていました。漆塗り木棺が盗掘で碎け、水没と乾燥を繰り返した堆積層です。

壁画の処置が急がれたこともあり、堆積層表面でみえた遺物は取り上げましたが、それ以外は漆片を掘り下げることなく、漆堆積層を20×25cmのブロックに切り分けコンテナに入れて石室外に出しました。

現場で確認できた出土品には、琥珀玉、刀装具片、木棺に付属していた金銅製飾金具と銅製釘隠、さらに被葬者の頭蓋骨片と歯、などがあります。鏡はありませんでしたが、その内容は高松塚古墳やマルコ山古墳と共に通します。刀装具片は楕円形環状をした鉄製の帶執金具と推定され、外面に金象嵌があり、内側には銀板を張っているようです。被葬者は性別不明ながら、壮年から老年と推定できました（京都大学片山一道教授による）。

現地の発掘は7月9日に終わり、引き続いて壁画の保存処置と危険箇所の取り外し作業が、東文研と専門技術者によっておこなわれました。発掘で持ち出した石室内の土は、順次コンテナごとX線写真を撮ったのち洗浄を進めています。なにが入っているか、乞うご期待。

（飛鳥藤原宮跡発掘調査部 花谷 浩）



金銅製忍冬文環座金具

長谷寺本堂の調査

この調査は、昨年3月3日の倒木で破損した屋根の修理を契機とし、その足場を利用し実施しました。考古・史料の研究員の協力を得て、屋瓦や棟札や、指図、文献史料などを調査し、『重要文化財 長谷寺本堂調査報告書』を刊行しました。

文献によれば、本堂は天文5年（1536）に焼失し、同7年には像高10m余の現本尊が造されました。それを覆う本堂は、大和郡山城に入った豊臣秀長によって天正16年（1588）に再興されました。その後、被災記事がないにもかかわらず、慶長12年（1607）の上棟など、本堂の造営記事が散見します。現本堂は、棟札から慶安3年（1650）の供養が明らかため、秀長の建てた本堂を骨格として、慶安3年に完成したのが現本堂と考えられてきたのです。

しかし調査の結果、増改築を示す痕跡はほとんどなく、まったくの新築であることが判明しました。また、細部意匠を他の同時期の建築と比較すると、現本堂の年代は慶安年間頃に編年できます。棟札によれば、現本堂の造営には、將軍・徳川家光の援助を得て工匠には当時の天皇の御所造営をおこなった精銳たちが招集されたことがわかります。筆頭棟梁と思われる今奥和泉守は、現在の東寺五重塔の棟梁でもありました。

すると、天正16年に豊臣秀長が建てた本堂の材料は、現本堂には使われなかたことになります。豊臣家造営の本堂がわずか50年ほどで傷むとは考えられず、この造営には建築的問題とは別の、何らかの社会的な理由が潜んでいたと思われます。

なお、調査成果の一部は、飛鳥資料館の企画展「豊山長谷寺本堂」（平成16年8月6日～31日）で公表し、棟札や指図、新出の文献史料など、本堂の写真をまじえて展示・解説しました。

（飛鳥藤原宮跡発掘調査部 箱崎和久）



長谷寺本堂全景